



1944年、長野県伊那市いなしに生まれる(のちに、越谷市に転居)。警察署勤務時代に、機関紙で短歌欄選者をしていた二木好晴ふたつきよしはるを知る。1965年に「白夜」に入会、1985年に「東武歌会」(のちに悠短歌会に改名)を発足する。

埼玉県歌人会賞、日本歌人クラブ南関東地区優良歌集賞等を受賞。現代歌人協会会員のほか、埼玉県歌人会理事を務めた。『年ごとに薔薇を』や『みすずかる』などの歌集がある。

綾瀬川は利根川水系、中川の支流で埼玉県内を流れ東京を経てやがて海へと注ぐ。

作者の住いは綾瀬川のほとりにあり、景観豊かな川沿いの遊歩道は朝夕の格好の散歩コースであった。桜の季節は殊に美しく作者の心を癒してくれたに違いない。喜びを共に喜び、悲しみは流してくれた綾瀬川は今日もゆったりと流れている。語り掛けるような下句が印象的な作品。

【平林静代氏解説】

伊藤悦子(No.7)

「濁り水ゆるく流るる綾瀬川
さうかお前ももう急がぬか」

濁り水ゆるく流るる綾瀬川

さうかお前ももう急がぬか



出版社に勤めていた23歳、残業続きの毎日だった。その日も遅い帰り道で、擦れ違った人から石鮫の匂いがした、銭湯の帰りだったのだろう。何気ない日常の1コマに詩情を見出して1首にまとめ上げる、その後の作歌の方向性を示す作品。

左の短冊は、歌会で知り合って結婚した妻へのプレゼントだったという。

【笛木智恵美氏解説】

関田史郎自筆短冊(No.9)
「擦れ違ひし人は石鮫の匂ひして
月高き街わが帰る」



1929年、埼玉県久喜市さいたまけんくさしに生まれる。粕壁中学かすかべちゅうがっこう校在学中、斎藤茂吉の『赤光』に感銘を受け短歌を作り始める。1947年、佐藤佐太郎の「歩道」に入会、その後「白檀しろかし」、「碑」を創刊する。

埼玉県歌人会賞等を受賞。埼玉新聞埼玉歌壇選者や、埼玉県歌人会理事を務める。『風影』や『疎林』などの歌集がある。また、埼玉の文学研究にも精力的に取り組み、『埼玉の文学めぐり』や『文学で歩くふるさと』などを刊行した。



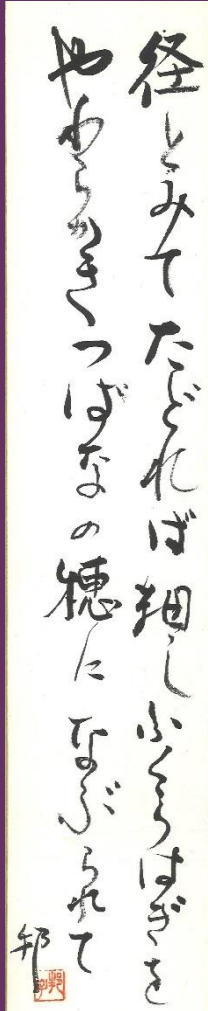
1923年、新潟県に生まれる(のちに、旧与野市や越谷市に転居)。1943年、杉浦翠子すぎうら すいこの歌を読んで感銘を受ける。1946年に加藤克巳かとう かつみの「鶏苑」創刊に参加、のちに「近代」、「個性」にも参加する。

埼玉文芸賞、個性賞を受賞。現代歌人協会会員のほか、埼玉県歌人会理事を務めた。『槐』えんじゆや『草の穂』などの歌集がある。

この歌は歌集「草の穂」に掲載されている「乳白色」と題された14首の先頭におかれた歌。

「つばな」はちばなの別名で、金沢にとっては「故郷の空」につながる草である。上句「径とみて」とは、自らに言い聞かすための言葉で、癒されたくて、あえてつばなの叢へ足を踏み入れたのだろう。邦子の「傷心」が詠われている。

【中井茂氏解説】



金沢邦子自筆短冊(No.13)
「径とみてたどれば細しふくらほぎをやわらかきつばなの穂になぶられて」

紙屑を庭に燃やせばきほひつつ
焙みじかし冬日の中に

佐藤佐太郎先生のお宅に大掃除のアルバイトで伺った際に、「私は、労賃を頂戴したあげく、持参の歌稿を見ていただいた。」と後記にある。この歌は、その折の即詠と言うことである。意味は、大掃除が大方終わり、庭先で紙屑その他を燃やしながら詠んだと言う。22歳の時の歌である。

【杉本康夫氏解説】

四元仰(No.15)
「紙屑を庭に燃やせばきほひつつ
焙みじかし冬日の中に」



1934年、鹿児島県肝属郡肝付町きもつきぐん きもつきぢやうに生まれる(1963年、川越市に転居)。中学生のころ、新聞に投稿した短歌がしばしば掲載された。1957年、佐藤佐太郎さとう さとろうの「歩道短歌会」に入会する。

埼玉県歌人会新人賞受賞、埼玉県歌人会賞等を受賞。昭和九年生まれ歌人の会代表や、埼玉県歌人会理事を務める。晩年は、短歌教室等で指導にあたり、川越短歌連盟会長も務めた。『黄塵』かうじんや『雲の反照』くもはんしょうなどの歌集がある。